

| | |
|--------------------|------------------------------------|
| Title | バイロンにおける革命の表出：『マリーノ・ファリエロ』 覚え書き |
| Author | 栗山, 稔 |
| Citation | 人文研究. 44 卷 6 号, p.259-272. |
| Issue Date | 1992 |
| ISSN | 0491-3329 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学文学部 |
| Description | |

Placed on: Osaka City University Repository

バイロンにおける革命の表出

——『マリーノ・ファリエロ』覚え書き——

栗山 稔

この種の事実としては唯一の

1816年12月12日、ヴェニスに滞在中のバイロンは元首官邸を見物した。官邸内の共和国国会議場の壁面はぐるりと歴代元首の肖像画で飾られていたが、楕円の額縁の一つは、あたかも肖像を覆い隠すように描かれた長方形の黒いヴェールの絵を納めていた。そしてヴェールにはそこが「犯罪のために斬首されたマリーノ・ファリエロの場所」¹である旨が記されていた。またバイロンは歴代元首の就任宣誓式場となった、元首官邸の中庭から二階の柱廊へ登る大理石の大階段を見物した。(バイロンの見た海神と軍神の像を据えた「巨人の階段」²は、ファリエロより後の時代の改築によるものである。)ファリエロはこの段階で元首帽を与えられ、またこの階段で、元首帽を剥奪され、斬首されたのだった。黒いヴェールと大理石の大階段、この二つがヴェニスでバイロンの「想像力を最も烈しく動かした。」³早速、彼はマリーノ⁴に次のように書いている。

ムアの『イタリア論』⁵を調べてくれないか。その何巻か忘れたが、元首ヴァリエール(ファリエリと書くべきだ)と彼の陰謀、あるいは動機のことを書いてあるはずだ。すぐにそれを写させて、手紙で届けて欲しい。それが要るのだ。こちらではあの事件についてムアほどいい記事が見つからない。黒いヴェールに隠された肖像、彼がかつて元首帽を戴き、後に斬首された元首官邸は今も存在しているし、見ることができるのだがね。方々の図書室を探したのだが、一人の貴族に対する私的な憤懣から出た動機について書くことは、昔の貴族階級の政策が許さ

なかったのだ。・・・現に元首の座にある者が共和国に対して陰謀を企てた——まさにこの状況がこの事件を最も注目すべき事件、全ての国の全歴史上、この種の事実としては唯一のものとしている。⁶

バイロンは事件の現場に立って、「一人の貴族に対する私的な憤懣」から叛逆罪を犯すにいたったファリエロの「炎のような性格」と、現職の元首の叛逆という事件の「特異性」に「劇的な」興味を刺激されたのだった。⁷そして『マリーノ・ファリエロ』が実際に執筆された1820年の春から夏にかけての期間、彼を衝き動かしていたものも同じ興味であったのである。

ファリエロの「私的な憤懣」とはおおよそ次のことを指す。若い貴族のステノは元首官邸で催された大祝宴の席で、元首夫人の侍女の一人で、想いを寄せていた娘に「手綱を解かれた若駒のような」⁸無礼な振る舞いに及ぶ。そこでファリエロはステノに退席を命じ、元首官邸での行儀を学んで来るように叱責する。この処置を恨んだステノは謁見の間の元首の椅子に元首夫人を不実な妻、元首を間拔けな亭主呼ばわりした落書きをする。この下劣な落書きが年齢の隔たった夫婦に対して世間が抱きがちな好奇心を刺激して、元首「夫人の貞節も、夫の名誉も面白おかしい話しの種」⁹にされていしまう。四十人委員会はステノのいたずらに対して禁固一月の判決を下す。しかしこの量刑はファリエロにとっては余りに軽すぎた。彼はステノばかりでなく貴族全員に怒りを爆発させる。たしかにこの事件には劇中人物の一人ベニテンディが言うように「一世紀の四分の三の歳月を生き、頭上に数々の榮譽を受けたヴェニスの大元帥が・・・若者の怒りの挑発に激怒して」¹⁰分別を失い、重大な結果を引き起こしてしまったという異常性がある。また現に国家の最高位にある者の叛逆的陰謀を、同じベニテンディが言うように、「聞いたこともない犯罪」¹¹と考えれば、たしかにこれは特異な事件である。バイロンはこの異常性、特異性に烈しい劇的興味を刺激されたのである。

ところでファリエロの事件は「聞いたこともない犯罪」、「この種の事実としては唯一のもの」と言えるほど特異な事件だろうか。民衆の人気を利用して共和制を君主制に変えようと計っているという野心を疑われたジュリアス・シーザーを思い出すまでもなく、これはむしろ為政者の自然な野望から起こる通常の政変であったのではないか。ヴェニス「共和国も、その歴史の中で何度か、君主制に移行する危険をはらんだ時期があったのである。そういう危険を感じさせた人物が、そろいもそろって、政治軍事両面に目ざまし

い業績を残し、それによって共和国に、後々まで影響を与える貢献をした元首たちであったのが、この課題 [= 共和制を維持し続けるという課題] のむずかしいところであろう。」¹² バイロンはファリエロを政治、外交、軍事、いずれの面においても輝かしい経歴の持ち主として描いている。劇中人物の全てがこのことを証言する。彼に対する判決も「かつての海軍提督、陸軍司令官、数え切れぬほどしばしば高い使命を、いや最高の使命を国家から託されたヴェニス¹³の貴族」と呼びかけている。そして民衆の人気も絶大であった。「私はヴェニスの守護者と呼ばれ、私の名を聞くと民衆は帽子を空へ投げ上げ、何万もの人々の歓呼が起こり、神の祝福と名声と長寿を祈ってくれた。」¹⁴ これはファリエロ自身の回想の言葉であるが、回想されている情景は事実と考えてよい。ファリエロは民衆の人気を頼みとして、共和制を破壊し、君主となろうという野心を抱く可能性の高い危険な人物と考えるのが自然であるように思える。

またファリエロの時代は「イタリア各国での君主制度による小国統合の傾向」¹⁵ が続く時代でもあった。すなわち時代は共和制の政策決定の方法そのものを危惧したマキアヴェッリの時代へ向かって動いていたのである。

共和制で行われている政治上の手続きは、実にゆっくりとしたものであるのが普通である。立法にしても行政にしても、どんなことでも一人で決めることはできず、たいていのことは、他の何人かと共同で行う仕組みになっている。それで、これらの人々の意志の統一をはかるのに、かなりの時間が必要になってくる。このようにゆっくりとした方法は、一刻の猶予も許されない場合、非常に危険なものになる。だから共和国は、このような場合のために、(古代ローマのような) 臨時の独裁執政官のような制度を必ずつくっておかねばならない。・・・このような制度の必要性に目覚めない共和国の場合、従来のような政策決定を守ろうとすれば、国家は滅びてしまうであろうし、そうかといって国家の滅亡を避けようとするれば政体そのものをぶち壊さなくてはならないという壁に、必ず突き当たるものなのである。¹⁶

そして「国家の滅亡」よりも「政体そのものをぶち壊」す方を選ばなければならない状況という判断に傾く為政者がしばしば現れる時代であったのである。ファリエロの異常な激怒は、このような判断を隠した激怒であったと考えれば、理解し易くなるように思われる。

このようにシーザー以来、共和制の歴史において繰り返された事件としての性格が、また一四世紀から一五世紀へと流れる時代の中では特に自然であった事件としての性格が、バイロンの『マリーノ・ファリエロ』にも浸透せずにはおかなかった。例えば甥のバートゥッツィオ・ファリエロは叔父が怒りの発作で叩きつけた元首帽を拾い上げて、「この軽蔑なさった帽子をおそらく王冠と取り替えられるまで、もう一度被って下さるようお願いいたします。」¹⁷ と言う。この時甥は叔父の野心を正しく言い当てていると言えるだろう。そして叔父は甥の拾った元首帽を手に独白する。

空洞の安びかの玩具よ。王冠の内張り同様、刺が一面に突き立っているが、刺で傷つく額に、全てを支配する王の威厳を与えはしない。空しい、金ぴかの、卑しい玩具よ。仮面として被っておこう。おまえを被ると頭が何と痛むことか。お前の不実な重みでこめかみが熱病患者のようにずきずきする。お前を王冠に替えられないだろうか。民衆をないがしろにし、元首を全くの飾り物にして、百の手で支配する元老院が握りしめているブリアレオースの玉笏を砕くことはできないのか。これに劣らぬ困難な仕事を私はこれまでの生涯に成し遂げてきたのだ。¹⁸

ここにはファリエロの野心がきわめて明瞭に顕れている。彼の野心の挫折は、人間性に深く根を下ろし、また時代の要請にも応えた野心であったにもかかわらず、このような野心を未然に防ぎ、共和制を維持するためにヴェニス共和国の政体に加えられていた配慮の勝利であったと言うべきだろう。

このようにみえてくると、ファリエロの事件は有能な為政者が民衆の人気と時代の要請を利用して起こしたありふれた事件であったことが分かる。そして誰しも気づくこの事実にバイロンが気づいていなかったとは考えにくい。それでは彼が事件の特異性を強調するのは、先にふれた事件の誘因の卑小さと結果の重大さとのアンバランスが感じさせる異常性について考えていたことであろうか。それともバイロンは事件の別の側面について考えていたのであろうか。

若者の怒りの挑発に激怒して

たしかにファリエロの事件は困難な時代を四分の三世紀も生きて、元首にまで選ばれた思慮深い老人が「若者の怒りの挑発に激怒して」、常軌を逸した狂乱状態に陥った異常な事件という印象を多くの劇中人物に与えている。バ

イロンがファリエロの生涯に劇的な興味を抱いた時、関連記事の写しを求めたムアの『イタリア論』も「なぜ取るに足りない原因から重大な結果に発展したのか不思議である」と書いている。¹⁹ たしかにステノの元首夫妻に対する中傷はいたずらとして無視することもできたように思われる。事実、元首夫人アンジョリーナは「たしかにひどい侮辱でしたが、無分別な人の嘘の嘲笑自体は気にしておりません」²⁰ と言って、ほとんど問題にもしていない。彼女はただ中傷が夫の「魂に与えた影響、致命的な深い傷を心配」²¹ する。彼女にはなぜ夫がこれほど激怒し、ステノに重い刑を望むのか理解できない。彼女は「ステノが名誉を失ったことにくらべれば、他の罰など軽いものです」²² と言って、ステノの虚偽が明らかにされたことに満足している。アンジョリーナが問題にせず、ステノに対する判決も、世間も、根も葉もない中傷にすぎないと認め、ステノ自身も「恥入り、悔俊」²³ している状況の中で、ファリエロ一人が「致命的な深手」を受け、法外な厳罰（死刑）を要求し、要求が入れられないと知ると、常軌を逸した怒りを爆発させたことは、いかにも不自然であるように思われる。²⁴ ファリエロがステノの中傷を野心実現の契機として利用するために、熟慮の上で激怒しているような印象を与えるのも、彼一人の反応の異常性にあるのである。

この異常さをやわらげるためにバイロンは二つの方法をとっている。一つはファリエロが娘のようなアンジョリーナと結婚したことで、「年齢の奇妙に不釣り合いな」²⁵ 夫婦に好奇の目を向ける世間に、精神的な負い目を感じていたと想像させる場面をつくったことである。ファリエロはこの結婚について少なくとも弁明の必要を感じている。次の対話をみてみよう。

ファリエロ、お前のお父さんは私の友人だった。不公平な運命のためにお父さんは、善人同志をいっそう強く結びつける好意の負債を、私に対して負われることになった。そして死の病が重くなった時、私たちの結婚を望まれたのは、負債を返却するためではなかった。借りはずっと以前に忠実な、真の友情によって完済されていた。お父さんの目的は孤児となる美しいお前を、この悪のサソリの巣のような都で、孤独な持参金のない娘を襲う危険から、安全で名誉な場所に置くことだった。私はお父さんと同じ考えではなかったが、死の床の安らぎとなる考えに反対したくはなかった。

アンジョリーナ、あなたは私の若い心がいっそう幸せになれると思う選択があれば話すように言われました。そしてヴェニスなどの階級にも負けない持参金を持

たせよう、父の最後の命令で得た権利は放棄しよう、立派な申し出をされました。

ファリエロ、だから愚かな老いぼれの卑しい気まぐれや、老人の烈しいにせの色欲が娘の美しさや、若い花嫁を欲しがらせたわけではない。火のような青年時代にもそんな欲望は抑えていた。私の老齢は色欲の不治の病に犯されて、不徳な男の白髪の年月を汚し、消え失せた喜びの代わりに淫楽の澱を死ぬまであさり、利己的な結婚で、まっとうな妻の座を拒むにはあまりに無力だが、わが身の惨めさを理解できないほど鈍感ではない、若い生け贄を買うようなまねはしていない。私たちの結婚はそんなものとは違う。お前は選択の自由を与えられていた。その上でお父さんの選択を主張する答えをしたのだ。²⁶

ファリエロは死の床に伏す親友ロレダーノから娘アンジオーリーナを妻として保護して欲しいと依頼されたわけである。彼は友人を安心させるために承諾する。しかし彼はアンジオーリーナに意中の人があれば、持参金を整えて嫁がせようとする。しかしアンジオーリーナは父の命じた結婚を自ら希望する。ここには若い娘との結婚を自分自身に対して、また世間に対して弁明し、正当化しようとする老人の意識が明瞭であろう。しかしここには不必要であるばかりか、不適切にも思える言葉が使われていることもまた明瞭である。「老人の烈しいにせの色欲」、「若い花嫁を欲しがらる」、「色欲の不治の病に犯される」、「淫楽の最後の澱をあさる」、「若い生け贄を買う」等々の表現は、金にものを言わせて若い娘と結婚した老人に対する世間の容赦のない悪口にふさわしい言葉であろうが、たとえその世間に反論したい気持ちを込めるとしても、結婚の経過をアンジオーリーナと回想する対話の中で使う必要がある言葉とは思われない。このような言葉は「年齢の奇妙に不釣り合いな」結婚を世間がどのように噂しているか、絶えず気にしているファリエロの心理を無意識の内に露呈しているように思われる。すなわち負い目を感じていたからこそ「痛いところ」²⁷を突かれた狼狽を思わずさらす言葉が出てしまったのである。そしてこのような狼狽の中で自己の正当化が途方もない怒りとなって爆発することは十分理解できるだろう。

ファリエロの途方もない怒りを理解させるために、バイロンはさらに彼の「炎の性格」を強調するエピソードを描いている。ファリエロがトレヴィーゾの町で若い総督兼守備隊長を努めていた時、祭礼の日に聖体を捧持する司教の到着が謂われなく非常に遅れた。ファリエロは司教を叩き、司教はよろめ

いて、聖体を取り落としてしまった。²⁸ この神を畏れぬ短気と「痛いところ」を突かれた逆上とが結びつけば、「取るに足りない原因」から「重大な結果」が引き起こされたとしても、少しも「不思議」ではないとバイロンは考えるのである。

以上みてきたように、「元首帽を王冠に替え」ようとする野心が、史上、繰り返して大事を引き起こし、また大事が取るに足りない原因から引き起こされることを認めるとすると、バイロンがファリエロの叛逆的陰謀の特異性を強調し、「この種の事実としては唯一のもの」とまで言うのは、彼が事件を全く別の角度から捉えていたことを示していると言わざるを得ない。すなわちバイロンはファリエロの事件に、共和制を破壊して君主になろうとする自然な野心の力学に目をつむるようにして、別の運動を見ているのである。

ファリエロの野心はステノの量刑に対する不満が引き金となっていた。彼が死刑を要求するのは、激怒の中で、ステノの罪を元首夫妻に対する個人的な中傷にとどまらない、国家に対する叛逆的陰謀にまで拡大してしまったからである。そして彼はステノの叛逆罪を死刑によって罰しない元老院は、同じ叛逆罪を犯したも同然であると考えている。²⁹ すなわちファリエロの野心は、激怒の中で、国家に対する叛逆者を一掃するという名分を与えられるのである。ところでこのような名分を与えられた野心は、「ヴェニス共和国では元首もまた一市民である」³⁰ という事実によって、複雑な様相を帯びることになる。すなわちファリエロの野心は正当な裁判の要求、市民的権利の主張といういっそう高い大義の側面を与えられるのである。こうして元老院の平衡感覚を示すと評してもよい量刑は、「民衆をないがしろにし、元首を全くの飾り物」にして、仲間の支配階級を護る元老院の専制の証拠とされ、彼の野心は市民階級の権利を擁護する運動の装いを呈することになる。

こうしてバイロンは劇中ヴェニス共和国の政体をきわめて専制的な貴族政治として描くことになる。たしかにファリエロの時代、共和国政府の主だった役職に選任される資格のある共和国国会の議員は世襲制となっており、国家の最高決議機関である市民大集会は名目的なものであった。すなわち国民は重要な国政に関与できる階級（＝貴族）と関与できない階級（＝市民）とに分かれていた。さらに「非常時には、共和国国会や元老院での一般討議にかけずに、権限を委託された少数の委員の間で討議するだけで政策を決定する方法」³¹ がとられていた。いわゆる十人委員会である。このように少人数で重要な決定を下し得る体制は、マキアヴェッリが指摘したとおり、共和制を

維持するためにヴェニス共和国がやむを得ず採用した措置であった。しかしバイロンはこれを、いわば今日の日で、完全に専制と呼ぶべき体制として描いたのである。彼は強い権限を与えられた十人委員会の最重要構成員であるファリエロに「元首は美しい飾りにすぎない。元首帽は王冠ではない。この正装も・・・哀れな操り人形に貸与されただけのものだ」³²と言わせる。ここには元首を無力な「飾り」、「操り人形」と表現することによって、元首が国王ではないことに対するファリエロの不満と同時に、元老院の強大な権力を印象づけようとするバイロンの意図がある。こうしてファリエロは「民衆の抑圧を策謀して王冠を被った千人」³³の一人ではなく、「民衆の解放を策して死んだ一人の元首」³⁴に仕立て上げられてゆく。バイロンはファリエロの野望が引き起こした武力政変を特異な市民革命とし捉えたのである。

かくあるべき自己・かくあった自己

こうしてファリエロは、野望を企む「頭脳に奉仕する他人の手」³⁵を国営造船所の謀叛人、いやバイロンの立場から言えば国営造船所の革命家に求める時、ますます民衆の権利の擁護者という姿勢を装うことになる。幸いこれまでの彼の経歴は「彼が度量の広い人で、民衆が抑圧を受けているのを見れば同情し、その苦しみを分かち合う人だ」³⁶という評判を確立していた。ファリエロ自身も次のように断言している。「共和国の記録を読んでくれ。多くの地方や都市の総督としての仕事が私の証人だ。私が抑圧者であったか、同じ人間として感じ、考える者であったか一目瞭然だ。」³⁷すなわち彼は民衆の権利の擁護者を装うというよりも、昔の自分を装うことで、彼に「奉仕する他人の手」を確保することができたのである。

劇中、アンジオーリーナは繰り返しファリエロに「かくあったあなた」に戻って欲しいと願う。「愚かなステノの下品な落書きが見つかって、あなたの平静を乱してから、あなたはすっかりお変わりになりました。私はあなたをお慰めして、かくあったあなたに戻っていただきたいと願っています。」³⁸彼女はステノに対する怒りがファリエロにとって「かくあるべき」自己を国王としてしまっているなどとは疑いもせず、彼女にとっての「かくあるべき」夫、すなわち「かくあった」夫に戻って欲しいとひたすら願う。この「かくあった」ファリエロは単に民衆の権利の擁護者というだけではない。アンジオーリーナはファリエロとの結婚を決意したのは「愛に値する全ての高貴な資質」、「人間の最も優れた、清らかな感情」、「高貴さ、勇敢さ、寛大さ」、「軍

人、市民、友人としての全ての資質の豊かさ」に気づいたからだと言っている。³⁹ 彼女が戻って欲しいと願う「かくあったあなた」はこれら全ての資質を備えていたファリエロなのである。すなわち政治的大義を擁護する政治家であるばかりでなく、道徳的正義を擁護する市民でもあったのである。こうして野心を隠して「かくあった」自己を演じるファリエロは、アンジオリーナの結婚の選択と彼女の願いを裏切り、娘を託した親友ロレダーノを裏切るばかりでなく、過去の自分自身を裏切ることにもなる。元老院の「操り人形」であることを拒否したファリエロは、「かくあった」自己を演じる「操り人形」となってしまったのである。ファリエロは、自分は若い娘を色欲の犠牲にした老人とは違うと言っていた。しかし彼は、結局、アンジオリーナを野心の犠牲にしているのである。

国営造船所の革命家イズラエル・パートウツィオは、元首ファリエロと出会った時、すでに蜂起の準備を終え、「ただ蹶起の時を待つばかり」⁴⁰ であった。彼は「成功を二重に保証する者」⁴¹ としてファリエロを誘い込もうとする。そのため彼は市民の正義の味方であった「かくあった」ファリエロに貴族の横暴を訴える。「傷つけられ、虐待され、軽蔑され、踏んづけられたのは私一人ではありません。・・・兄弟、両親、子供、妻、姉妹が貴族の抑圧、穢れをなめさせられなかった者は一人もおりません。」⁴² こうしてファリエロは革命家を「かくあるべき」自己に奉仕させる「他人と手」として利用しながら、同時に彼らの手で「かくあった」自己を演じさせられる「操り人形」にされてしまうのである。

国営造船所の革命家たちの議論の中でバイロンが中心的に取り上げた問題は、革命の手段としての流血である。すなわち市民的自由を確立するための手段として、専制の暴力を模倣することが許されるかどうかという問題である。そして彼らも多くの革命家のように政治的大義を実現するためには、道徳的正義を一時的に停止して、反対者の生命を軽視するという考えを、積極的か消極的かの違いはあるけれども、支持している。この問題はファリエロが革命家に参加したところで、バートラムによって最終的に提起されている。彼は「たとえ悪党の血でも、血を見て吐きそうになった」⁴³ ことを同志に見とがめられ、彼らの「企てにとって致命的なためらいと優しさ」⁴⁴ を危ぶまれている青年である。「偉大な同志が、その参加によって、我々の大義を一段と確実に安全なものにされ、それだけ犠牲者の一部にも慈悲の光がさし始めたと思うので、以前に尋ねた質問をもう一度繰り返したい。貴族全員がこの

殺戮で死ぬ必要があるのか。』⁴⁵ 道徳的正義の一時的停止を簡単には容認できないバートラムによって、政治的大義の遂行も「殺戮」というその行為の本質を見据えられている。しかし彼の声は政治的大義の優先を叫ぶ革命家の中ではきわめて無力である。「我々の手にこのような行為を求めるのは大義であって、我々の意志ではない。我々は全ての血痕を自由の泉で洗い流すだろう。・・・皆殺しだ。皆殺しだ。今、憐れみを語っている時か。」⁴⁶

このような革命家の中ではファリエロも「かくあった」自己を完全に演じ切ることはできない。なぜなら「ヴェニス共和国では元首もまた一市民」であるから、「かくあった」自己が尊重しなければならない市民の生命には、当然、市民である貴族の生命も含まれるからである。政治的大義と道徳的正義の擁護者であった「かくあった」自己から、ファリエロは一方を切り捨てざるを得なくなる。

私は王冠をあきらめて、ヴェニス共和国に自由を回復しよう。ああ、しかし、この手段は何ということか。高貴な目的が手段を正当化してくれる。人間の血数滴が一体何だ。いや違う。暴君の血は人間の血ではない。彼らはモウロックの化身のように我々の血を吸った。彼らが賑やかにした墓に彼らを葬る時がついに来たのだ。ああ、人間の世よ。人間の最善の企てよ。お前の正体は何なのだ。罪を罰しようとするれば罪を犯さなければならないとは。⁴⁷

ここでファリエロは政治的大義が道徳的正義にもとる殺人を正当化する、いや殺人の対象は人間ではなくモウロックの化身なのだから、道徳的正義にもとるわけでもないという完全に革命家の論理を語っている。彼は革命家の間で「かくあった」自己を演じ続けるうち、彼にとっての「かくあるべき」自己を実現することを放棄して（「王冠をあきらめて」）、完全な革命家となったのである。こうして君主になろうと政変を企てた元首のありふれた物語は、市民を指導して上からの革命を遂行しようとした元首の物語という、バイロン好みの特異性を完全に獲得することになった。

革命よ、糞喰らえ。しかし・・・

ところでバイロンはファリエロの革命の失敗の原因を革命家の政治的大義の優先としている。すでにふれたように革命家の一人バートラムは彼らの「企てにとっては致命的なためらいと優しさ」を持つ人物であった。彼はため

らいがちに道徳的正義に従って行動する。彼は、父が連れてきた孤児のバートラムの面倒を、少年時代以来兄弟のようにみてくれた一人の貴族に、明日(蹶起の日)どんなことがあっても、元老院の召集に応じないように頼む。この貴族は容易に謀叛を察知して、バートラムを捕らえ、計画の全貌を知ってしまう。バイロンはバートラムの道徳的正義が革命の政治的大義を裏切る結果となったと言うのである。しかしバートラムの裏切りは革命の失敗の直接の原因となったに過ぎない。真の原因はすでにみたファリエロ自身の裏切りにあるように思われる。彼は「かくあるべき」自己を実現しようとして、「かくあった」自己への回帰を願う妻ばかりでなく、「かくあった」過去の自分自身を裏切っている。また「かくあった」自己を演じることで革命家を裏切っている。最後に彼は完全な革命家となることで市民への裏切りを犯すことにもなる。バイロンは革命の失敗の真の原因をこのような重層的な裏切りの構造として描いているように思われる。

しかしこのように革命が失敗に終わる経過を描いているとしても、バイロンが貴族による市民の抑圧を肯定しているなどと考えるべきではない。このことは革命への蹶起とその失敗、そして裁判の場面を通じて変化してゆくファリエロの姿によって示されている。すなわち彼は「かくあるべき」自己が、アンジオリーナの願いのとおり、「かくあった」自己であって、君主でも「かくあった」自己の偽りの演技でもないことを悟ってゆくのである。すなわち彼は彼の犯した幾重もの裏切りから立ち直り、予言者的な風格と尊厳とを備え、ヴェニス共和国の貴族が真の共和主義の精神に立ち戻ることを願う。そしてもしそうでなければヴェニス共和国は滅亡すると彼は予言する。

遠い時代が未来の時の深淵から浮かび上がり、この両眼に、それが閉じるより早く、この誇り高い都の運命を示す。・・・そうだ、時は静かに運命の日をはらみ、砦を築いてアッティラを防いだ都が、血を流すこともなく——この都の盾となつてしばしば血を迸らせたこの老人の血管が、やがて生け贄として流すほどの血を、最後の防衛に流すこともなく——卑怯にも、篡奪者のアッティラに屈することになるのだ。ヴェニスを取り引きされ、蔑む者の分け前となり、膝を屈して帝国の一地方、都ではなくてつまらない町となるのだ。⁴⁸

ここでバイロンはファリエロの予言のかたちを借りて、彼自身の時代のヴェニス共和国の運命を語っている。「篡奪者のアッティラ」は「余はヴェニス共

和国にとってアッティラとなろう」⁴⁹ と言ったナポレオンへの言及である。ヴェニス共和国はアッティラの進撃をラグーナ（潟）に避けて始まり、1797年、「篡奪者のアッティラ」の進撃の前に戦うこともなく千年を超える歴史を閉じる。同年10月、カンポ・フォルミオの条約によって共和国領はフランスとオーストリアの間で分割され、ヴェニスもオーストリアに占領される。1805年、アウステルリッツの戦いの後は皇帝ナポレオンの支配下に移され、1814年、ウィーン会議により再びオーストリア領となり、1866年、統一イタリアに編入されるにいたる。⁵⁰ 文字どおりヴェニスは「取り引きされた」のである。ヴェニスの貴族はファリエロの君主制への野望を挫いて共和制を護ったように見える。しかしバイロンはファリエロを真に市民的正義の擁護者へと蘇らせ、遠い未来に現実となるヴェニス共和国の滅亡と、専制的君主への隷従を予言させることによって、専制的な貴族を断罪しているのである。

バイロンが革命の失敗を描くことによって貴族の専制を肯定したと考えることが間違いであるように、革命の失敗の直接的な原因とすることによって道徳的正義の中断を肯定しているとも考えることも同様に間違いである。処刑前のファリエロの予言者の尊厳は彼がついに道徳的正義と政治的大義の結合を体現するにいたったことを示している。しかしこの作品で両者の結合を終始体現する人物はアンジオーリーナであろう。彼女はステノにただ良心の反省以外の罰を求めず、復讐的に死刑を要求するファリエロに「天は敵を赦すことを命じておられます」⁵¹ と、ひたすら道徳的正義を主張して譲らない。また彼女は「かくあった」ファリエロが道徳的正義と政治的大義の擁護者であったからこそ、彼に過去の自分を取り戻すように繰り返し望んでいるのである。彼女の悲劇は危機的な瞬間に彼女が夫の中に両者の結合を回復することができなかったことである。しかしこの両者の結合が多くの人々に体現され、多くの人々を動かす力となることが、現実の革命的状況の中ではきわめて困難であることは、国営造船所の革命家たちの議論を読めば明らかである。こうしてファリエロを「かくあった」自己に戻すことに失敗したアンジオーリーナは、「今後、私はただ神にのみ身を捧げると知って下さい」⁵² と言って、一切を捨てて修道院に入ってしまう。このことは彼女の体現する価値が現実の中ではいかに無力であるかを、自ら革命的状況の中に身を置いていたバイロンが絶望的なほど明瞭に認識していたことを示しているのである。

論述の過程でふれてきたように、ファリエロの事件はおそらく「陰謀に

よって専制の座に登ろう」⁵³ とした有力者の野心が民衆の人気と結びついた典型的な武力政変であったろう。この典型的な政変をバイロンは専制から市民を解放する上からの革命という特異な事件として捉えた。このことはバイロンがこの事件を彼が生きた時代の革命的状況と重ねてみていたことを示している。我々は抑圧的な支配階級と被支配階級の市民的権利の要求とが二極的対立を深めた 1810 年代のイギリスの状況を思い起こす必要がある。⁵⁴ この状況はワーテルロー以後、ヨーロッパに旧体制が回復されるにつれていっそう尖鋭化してゆく。バイロンは 1816 年以後イギリスを去って、イタリアに住んでいたが、そこではイタリア統一運動がオーストリアからの解放と独立を目指して戦われていた。バイロンはこの運動に直接かかわっており、圧制からの市民的自由の問題は彼にとってきわめて身近な関心事であったのである。このような革命的状況に身を置いていたからこそ、彼は私的な怒りが公的な怒りに転換され、非理性的感情が理性的論理を装う恐ろしさを十分知っていた。このような理性的論理の偽装は、ステノの中傷に対する異常に重い刑の要求が市民の権利の正当な要求とされ、これを不当な要求として退けることが市民の権利を踏みこむ専制とされて、革命が正当化されてゆく過程にもみられるだろう。しかしそれは革命の反対者を人間とは認めず、したがって反対者の生命を奪うことは殺人ではないと言う論理に最も明瞭である。バイロンはこのような似非論理に強い嫌悪を示している。似非論理が通用する限り革命は真の革命とはならないと彼は考える。政治的大義の主張は道徳的正義と結びつくのでなければ、革命は失敗に終わり、さらにフランスとオーストリアの間で「売り買いされる」イタリアに、真の自由は回復されないとバイロンは言っているのである。しかし、真の革命は絶望的に困難と知りつつ、「革命よ、糞喰らえ。しかし地獄の穢れから地球を救うものは革命のみ」⁵⁵ という現実をも認めざるを得ないバイロンの苦悩が『マリーノ・ファリエロ』の複雑さと魅力を生み出しているのである。

注

- 1 George Gordon Lord Byron, *Marino Faliero*, V, i, 499-500. 以下幕、場、行のみを示す。また固有名詞はバイロンの英語表記に従ってカタカナ表記する。
- 2 V, i, 516.
- 3 Peter Quenell (ed), *Byron, a Self-Portrait, Letters and Diaries 1798-*

- 1824 (London: John Murray, 1950), II, 404.
- 4 John Murray (1778-1843). バイロンの友人で、出版者。
- 5 John Moore, *A View of Society and Manners in Italy* (1781) のこと。
- 6 Leslie A Marchand (ed), *Byron's Letters and Journals* (London: John Murray, 1973-82) , V, 174.
- 7 *Marino Faliero* Preface. 8 II, i, 422. 9 II, i, 429-30.
- 10 V, i, 239-44. 11 V, iii, 15.
- 12 塩野七生『海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年』(昭和 55-56 年、中公文庫版、平成元年)、上、291。
- 13 V, i, 477-80. 14 IV, ii, 150-154. 15 塩野七生、上、321。
- 16 マキアヴェッリ『政略論』、塩野七生、上、319-20 より引用。
- 17 I, ii, 253-4. 18 I, ii, 259-72. 19 *MF* Preface 参照。
- 20 II, i, 32-3. 21 II, i, 34-5. 22 II, i, 232-3.
- 23 V, i, 400. 24 この点の不自然さを指摘する批評は多い。
George Steiner, *The Death of Tragedy* (London: 1961), 204 参照。
- 25 II, i, 86. 26 II, i, 292-324. 27 II, ii, 170.
- 28 V, ii, 17-41 及び 'Cronica di Sanuto' appended to the play 参照。
- 29 例えば II, i, 238 参照。 30 I, ii, 219. 31 塩野七生、
上、320。なお「第五話 政治の技術」参照。 32 I, ii, 411-5.
- 33、34 V, iii, 17-9. 35 I, ii, 279-80. 36 II, ii, 174-6.
- 37 III, ii, 182-6. 38 II, i, 219-22. 39 II, i, 93-101 参照。
- 40 I, ii, 492. 41 II, ii, 155-6. 42 I, ii, 460-9.
- 43 II, ii, 72-3. 44 II, ii, 68-9. 45 III, ii, 269-75.
- 46 III, ii, 79-81; 277-8. 47 IV, ii, 159-68. 48 V, iii, 41-56.
- 49 Lord Byron, *The Complete Poetical Works*, ed Jerome J McGann
(Oxford: Clarendon Press, 1986) , IV, 561.
- 50 *CPW*, IV, 561-2 及び塩野七生、下、「第一四話 ヴェネチアの死」。
- 51 II, i, 260. 52 V, i, 542-3. 53 V, i, 196.
- 54 拙稿「『逍遙篇』とその時代」(『人文研究』第 35 巻第 7 分冊、大阪市立
大学文学部、昭和 58 年) 参照。
- 55 Lord Byron, *Don Juan*, VIII, 51.